

無政府主義（メモ）

嶋尾 稔

1900年に福澤諭吉の委嘱を受け福沢の校閲を受けたうえで慶應義塾が学生に示した「修身要領」の29条からなる本文が個人の「独立自由」の精神を称揚していることはよく知られていることであろう。他方、その前文は、福沢の「皇室論」「尊王論」を踏まえたものであり、「凡そ日本国に生々する臣民は、男女老少を問はず、万世一系の皇室を奉戴して其恩徳を仰がざるものある可からず」と始まっている。

まだ無政府主義に傾く以前の社会主義者であったころの幸徳秋水が「修身要領」を批評している（「修身要領を読む」『幸徳秋水集』）が、福沢が日本の近代化のために個人の「独立自由」を強調してきたこと自体は評価しつつ、「社会公共の福利の為に、個人の福利を犠牲にする覚悟」や「社会に対する平等調和や公義公德を訓戒する」ことを軽視している点を批判している。個人主義や利己主義の風潮を憂い、幸徳秋水は次のように述べる。

（今日の憂ひは）自由競争あって、平等調和なきに在り。個人あって、国家なく、国家あって社会なく、換言すれば社会に対する公義公德を以て、一身を律するなくして、唯だ一身の利害を以て、社会の福祉を左右せんとするに在り。

社会の平等調和を最重要としつつ、国家を否定はしていないようである。この時点で万世一系の皇室についてどう考えていたかはわからない。

1910年6月、幸徳秋水は明治天皇暗殺を企てたという冤罪によって投獄され翌年1月に処刑されたが、投獄前から執筆にかかっていた『基督抹殺論』は獄中で書き続けられ1910年11月に完成し処刑直後の1911年2月1日に発行されている。その結論はこうである。

耶蘇基督は史実の人物に非ず。単に古代神話の糟粕渣滓と残骸断楚をもて作成したる一個生命なき偶像のみ。

キリスト教を古代神話の一種と見なしたうえで古代神話の現代的意義を否定する。

吾人は基督及び基督教が古代神話としての価値に対して相当の尊敬を払うべきも其現代宗教としての生命に至っては業に既に喪失せる者なるを知らざる可からず。

基督教徒が基督を以て史的人物となし其伝記を以て史実となすは迷妄なり。虚偽也。迷妄は進歩を礙げ虚偽は世道を害す。断じて之を許す可からず。

無政府主義者であれば、個人の自由を阻害するあらゆる権威を否定するのは当然であり、その権威の最たるものであるキリスト教を幸徳秋水が俎上に上げたこと自体はおかしくはないが、唐突ではある。ここに日本神話批判が含意されていたという可能性は十分あるだろう。幸徳秋水はキリスト教が古代神話から継承した要素として太陽神崇拜と生殖崇拜を強調している。それらの古代神話はそれを継承したとされるキリスト教とともに現代的な意義を否定されている。教育勅語は伊邪那岐伊邪那美を除外したが、天照大神を起点とする日本史を公式化した。幸徳の議論は太陽神から始まる日本史の否定を含意していたのかもしれない。しかし、もしこの推測が正しかったとして、この議論は天皇制批判として強力なものだったのだろうか。『基督抹殺論』のなかに福澤は一切出てこない。おそらく全く意識はしていなかったのだろう。仮にこの議論を福澤が読んだとして、自身の「帝室論」「尊王論」が痛撃を受けたと感じることは無かったのではないかと思う。福澤は神も仏も信じないひとであり、皇学者流の国体論に否定的であった*。それでも比類ない由緒の正しさを帝室に見ていた。幸徳の議論がもし仮に天皇制批判であったとしても、決して強力なものとは言えない。それを冤罪で捕まえた政府の怯懦を嗤うべきではあろう。

*福澤のキリスト教に対する態度は明治初期と後期では大きく変わっている。当初は独立を脅かすものとして痛烈に批判していたが、後には文明的な道徳の涵養に有益なものとして許容している。一時はユニテリアンに入れ込んだ時期もあるが、その後冷めている。最終的には「仏法にても耶蘇教にても孰れにても宜しい、之を引き立てて多数の民心を和らげるやうにする事」が大事と考えるようになる。

そもそも幸徳秋水はどれほど無政府主義だったのか。大正末年に無政府主義者が出版したパンフレット（『近代無政府主義運動史』）は、幸徳秋水が日本にバクーニンを紹介したことを特筆している。バクーニンの『神と国家（鞭のドイツ帝国と社会革命）』を流し読みした。バクーニンは個人の自由を阻害する神（教会）と国家の権威を全否定した。バクーニンが否定したのは勿論キリスト教の神であり、幸徳秋水の上の議論がその影響を受けて展開されていることは間違いない。バクーニンの議論では、宗教だけでなく観念論の哲学・形而上学や実証主義科学もその権威によって個人の自由を阻害するものとして否定されている（ただし、観念論者の抽象物である神と異なり、科学上の抽象は合理的抽象であり、本質的に真正で人生に必要なものとされる。それを学者の団体が支配するのではなく万人の資産とすることを主張している）。幸徳秋水がそこまで徹底した無政府主義の境地に達していたのかは不明である。バクーニンは勿論自分の対峙しているヨーロッパ・ロシアの知的伝統と正面から闘争しているわけであるが、幸徳秋水は果たして自らの知的伝統を根源的に見直すまでに至っていただろうか。

それはその後の無政府主義者も同じなのかもしれない。たまたま大杉栄にラブロフ論があることに気がつき、論集のなかの2, 3の小文に目を通した。それだけでいうのも何なのだが、舶来の過激思想にハマって、勘違いをした人という印象ではある。日本の左派インテリの典型パターンの先駆であろうか。ラブロフは無政府主義者ではなくナロードニキの指導者である。歴史の法則性のなかに現実を生きる諸個人を埋没させることを批判したよう

である。また民衆の惰性的な歴史伝承（歴史意識）に対してインテリゲンチヤが道徳的人格として批評的な歴史を提示することを主張したようである。惰性的な歴史も困るが、思想教化のための歴史もいただけない。一方的な批評的歴史をインテリの仕事と勘違いする伝統もこのころから始まるのかもしれない。歴史のなかの個人の役割については、ナロードニキからマルクス主義に移りメンシェビキに参加したプレハーノフも気にかけている。彼は歴史の法則性を肯定する立場に移ったので、長期的には法則が働くが、短期的には個人の役割が意味を持つとしている（そんなことを考えないボルシェビキは個人崇拜へと向かった）。無政府主義のバクーニンも現実を生きる諸個人を重視している。『神と国家』のなかで実証科学（コント、スペンサー）による一般化・抽象化が現実を生きる個人を捨象することを批判的に論じている（これ自体には私も賛成である）。しかし、その現実を生きる諸個人を国家に虐げられたものとして一般化・図式化することには無頓着なきらいがある。大杉栄は社会的個人主義という立場（社会に抵抗する個人主義でもなく社会を拒絶する個人主義でもなく多種多様な諸個人が社会を形成する個人主義）にたつようだ。社会について個人を権力的に拘束する制度として捉えるのではなく、諸個人が自発的に組織化してゆくものとして捉えるということらしい。現実を生きる具体的な個人とはかけ離れた図式的主張である。子供じみた発想だが、当人は高度な思索と自負しているようだ。こんな他愛もない議論をしていた大杉とその家族を1923年に殺害したのが、甘粕正彦である。幸徳秋水は冤罪であったとしても、大逆事件の処刑者のなかに実際に天皇暗殺をもくろむものが居た以上、無政府主義者のヒーローは最高度の警戒対象となっていたのであろう。無政府主義者は関係ないのだが、ロシア革命とコミンテルンの影響も社会主義者一般への弾圧を促す背景とはなっていたであろう*。一つ気になることがある。大正時代に現人神を強調するようになるドイツ帰りの東京帝大教授たち（筧克彦や上杉慎吉）の思想は無政府主義に対する反作用としての性格を持っていたのか。いまは攔く。

なお、無政府主義者を批判したからといって、レーニン主義者（労農派も含めて）を肯定するわけではないことを念の為言い添えておく。

*そもそも1911年の時点で天皇暗殺を企てる無政府主義者がいるとしたら、それは1905年のロシアの第一革命の影響であろう。しかし、彼らがどれだけロシア帝政と日本との相違を熟考していたかは怪しい。逆に官憲の側も帝政打倒を目指す勢力に対する漠然とした不安と警戒が過剰な反応を惹起したのではないか。荒畑寒村の回顧によれば、1917年にロシア革命がおこったときに日本ではロシアの事情について五里霧中、レーニンもトロツキーもどんな人かわからないというありさまであったという。そのようななかで無政府主義者も社会主義者も皮相な思想を叫び行動し、官憲は疑心暗鬼を増幅し弾圧体制を強化したものであろう。人民を弾圧する専制政府と戦う社会主義者・無政府主義者というアプリオリの図式はおそらく正しくない。幼稚で無知で皮相な理念主義者の浅薄さが怯懦な政府の極端な抑圧体制を作り出したということだろう。その後、ロシア革命の様子も次第に知られるようになり、結局コミンテルン先生の言い付けに従う第二次共産党が先生の教えの通り天皇制を絶対王政として倒さなければならぬと浅はかに信じ込むことになる。そういうコミンテルンの策謀が官憲の恐怖と警戒を増強し弾圧体制がさらに強固になるとい

う構図ではないか。天皇制ファシズムの弾圧と終始戦い続けた共産党の伝統なるものを美化したがる人がいるが、酷な言い方をすれば要は身から出た錆と言う話ではないだろうか。

付記

1910-1911年に南北朝正閏論争が生じている（結果南朝正閏が公式化される）が、この動きも無政府主義の帝政批判と無関係ではあるまい。南北朝正閏問題で注意すべきことは、この論争が起きる以前は南北朝併記が常識だったことである。だからこそ論争になったわけである。かつ、この問題に火をつけたが、民党の犬養毅であって、桂太郎政府批判という政治的出来事であったということである（犬養は頭山満らとともに孫文を支援するようなアジア主義者でもあった）。この後、周知のとおり、犬養は藩閥政治を否定し、普通選挙を実現し、5.15事件で暗殺される（犬養は統帥権干犯問題でも政友会総裁として党略的に浜口内閣を攻撃したが、最後は統帥権干犯に不満を抱く者たちに暗殺される。）。何を言いたいかと言うと、水戸学=『大日本史』が平泉澄の皇国史観に直結するわけではないということである。また、ロシア革命（第一も第二も）が世界に与えた（悪）影響の部分をもう少しちゃんと認識すべきなのではないかと思う。

南朝正閏説は平泉澄の皇国史観の重要な構成要素であるが、別に北朝正閏でも万世一系が成り立たないわけではない。三種の神器に対する北畠親房による抽象的な神聖価値付与はむしろ物質的基盤を不要にしたような気もする（私の主観的感想）。歴史上の人物の評価は所詮好みの問題である。

水戸学の影響が小さかったと言いたいわけではない。わが家が明治初期に作った家系図が楠正行につながるのにはまさに水戸学の影響であろう。わが祖先は変わり者だったらしく神仏分離のときに浄土宗を捨てて神道を選んだ。そんな家だったから水戸学の影響も受けやすかったのだろう。ちなみに周辺の家で神仏分離の際に仏教を捨てた家など聞いたことはない。水戸学やら神仏分離の影響が富山県の農漁村に及んだ事例として我が家は興味深い、一般的ではない。本篇の論点に戻るが、廃仏毀釈のインパクトを過大評価すべきではない。

久米邦武が示唆するように、この騒ぎの背景には太平記のヒーローである楠正成（とその後継者たる幕末の志士）を冒瀆するなという民間の通俗的感情があったのだろう。黒板勝美も、楠正成が忠臣だから南朝が正閏だというような俗論を本末転倒だとして批判しているが、世論の大半は学者論議に関心があるのではなくこの手の感覚で反応したものではあるまいか。